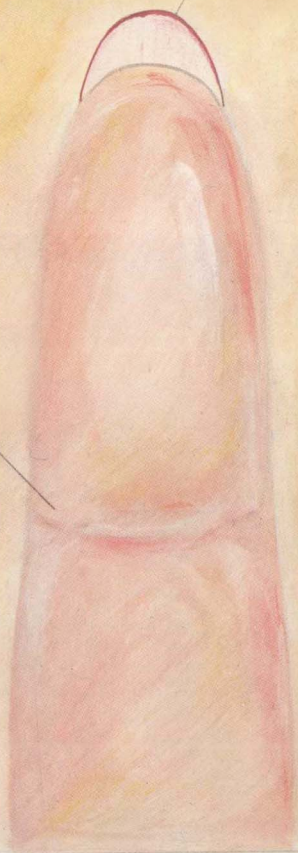
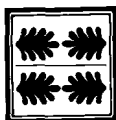


瀬戸内晴美



燃えながら



講談社文庫

燃えながら

瀬戸内晴美

昭和55年12月15日第1刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 豊国印刷株式会社

印 刷 豊国オフセット株式会社

製 本 株式会社国宝社

© Harumi Setouchi 1980

Printed in Japan

0193-316600-2253 (0) 定価 320円

(落丁本・乱丁本はおとりかえます)

燃えながら

瀬戸内晴美

目次

午後の愁い

七

若い愛

二七

青い花

四七

妻の椅子

六七

露草

七

女客

一〇六

感傷旅行

一二七

人魚の恋

明 暗

離 愁

パリの夜

天上の花

年 譜

一四八

一六

一八

二〇

二二

二五

燃えながら

午後の愁い

青山高樹町にある景山家の浴室の窓硝子はものものしいステンドグラスがはめこまれていた。模様はボッティチェリの春の構図を図案化したもので、東向きの大きな窓いっぱい七彩の硝子が陽を受けてきらめいている。午前十時すぎの太陽は群舞の裸女たちの肌や、森の樹々や花々を透して浴室に射しこみ、こもった湯気に七色の虹をかけていた。

浴槽は桃色大理石で楕円形につくられていた。当主の景山喜一郎の好みで、豪華というより、どこかけばけばしい淫靡な匂いがこもっている。一昨年の春、喜一郎は妾の露子とこの浴室に入っている時倒れたのだった。

「ああつ、誰か来て！ 旦那さま！ 旦那さま！ しっかりあそばして」

たまたま、浴室の外の廊下を通りかかった長男の妻の香苗の耳に、露子のけたたましい叫び声が入った。

香苗が、浴室のドアを叩いた時には、中からかかった鍵をあげようとして、逆上した露子の手が震え、なかなかあけられなかった。

ようやくドアが開いた時、全裸の露子は、あつと腰をひねって右手で前をかくした。とりのばせて、自分の裸のことも忘れきつていたのだった。桜色に湯で染めあげられた露子の軀からだは、このシヨックにも色があせず、二つの乳房が匂うように盛り上がっていた。長い洗髪を腰まで垂らして、女の香苗の目にもそんな露子はまぶしいほどなまめいてみえた。

「だ、ん、な……さまが……」

露子は、身も世もないようにむきだしの全身をすくませながら、香苗にあえぎあえぎ告げた。こもった湯気の中にうつ伏せに倒れている喜一郎の巨きな腰が香苗の目に入った。

「動かさないで！ 動かしちゃだめ！ そのままにしておくのよ」

香苗は足袋のまま、浴室にかけこむと、舅しゅうとの姿を見定め、すぐそこから走りだしていった。夫の良介は客の接待で熱海へ出かけて昨夜から戻っていない。離れの二階でまだ寝ている良介の弟の紀彦を起こし、香苗は喜一郎のかかりつけの医者之三宅博士に連絡した。

浴槽に浮かべたレモンの輪切りに腕をのびながら、香苗は二年前のあの朝のことを妙になまなましく思いだしている。

さつき、離れの喜一郎の病室になっている濡れ縁の外を通りかかった時、部屋の中から、
「あつ、旦那さま！ いけません、ああつ……」

という露子の細い笛のような声を聞いたことが、あの日の朝の露子の叫び声を思いおこさせたのにちがいがなかった。

つい昨日のようにあの朝のすべてはなまなましく思いおこされるのに、もうあれから二年あまりの歳月が流れている。その間に、景山家や香苗の身边にも何とさまざまな変転があったことだらう。

香苗はレモンで左の腕の肘をこすりながら湯の中に長々と脚をのばしていた。ちかごろの、街の中の温泉旅館には、こういう形の浴槽も出来ていると、何かの小説で読んだことがあったが、景山家のこの湯槽は人ふたりが、ゆっくり、軀をのばせるように傾斜していた。

香苗は実家の檜の厚板でつくった湯舟に入って育ったので、この家に嫁いで来た時、このけげばしい湯殿や、妙に恥ずかしい気持ちに追いこまれる浴槽になかなか馴れることが出来なかった。

「それにも馴れてしまったわ……馴れるってことは何て怖ろしいことかしら」

香苗はレモンの香の匂いたってきた湯の中に腕をのばしながら、自分の白い軀をみつめた。夫の良介の軀に、もうすっかり馴れきって、良介に押されるスイッチ一つで、どんな姿態にもなめらかに折れ曲がる自分の軀を、不思議なものをみるように見つめずにいられない。馴れたのは肉體ばかりではなかった。質実でつましい大学教授の娘に育った自分が、景山建設の社長の長男に強引な求婚を受けて嫁いで来て以来、およそ実家とは縁遠いこの家の雰囲気や習慣にも、いつのまにかすっかり心まで馴染みきってしまったている。

二十五の春嫁いできて以来、たちまちのうちにすぎ去った六年の中にも、良樹の出産、姑の死、

舅の発病と、事件は後から後からおこってきた。家庭に一つの事件がおこる度、嫁としての自分の立場は一つずつ礎石をうちこむように、重みとゆるぎなきを増してきたような氣もしてくる。

良樹を産んだ後、夫の良介が香苗の乳房の美しさの損われるのを厭がって、乳母をつけさせたので、今でも香苗の乳房はまるくひきしまり、娘のような柔らかな乳首は、きりつと、上をみあげている。娘の頃より肩や腕や腰に、ゆたかさがまし、香苗の三十歳の軀をうちから照り映えるように輝かしていた。

喜一郎が、好きで毎日たてさせていた朝風呂の習慣は、喜一郎が床について以来も景山家からは去らなかつた。父に代わって、景山建設を受けついだ良介が、やはり朝風呂党だつたせいもある。喜一郎の風呂は氣味の悪いくらい長湯だつたのに比べ、良介は全くの烏の行水だつた。それでも、朝起きてすぐざあつと湯にとびこんで上がつてくることで、良介の健康のコンディションが整うらしかつた。良介を会社に送りだした後で香苗が入る。古風な実家の襦しゅで育つた香苗は、決して男より先に風呂に入らない習慣だつたが、それも景山家へ嫁いで以来は、すっかり崩れてゐた。喜一郎が、湯は女の入つた後が、練れていて肌ざわりもいいし、若がえりに効くという持論を持つてゐるからだつた。舅より先に湯に入るなど、若い嫁だつた香苗にはかえつて窮屈きうくつで、汚すまいと氣を使い、それだけで神経が疲れ、へとへとになるくらいだつた。ようやくそれにも馴れた頃、喜一郎が倒れたのだ。

以前から好色だつた喜一郎は、倒れてから後も、半身の自由が利くようになると、もう、露子

をかまいたがるという噂が、看護婦や女中たちの間では公然と流れていた。そのせいか、看護婦や家政婦は一カ月とつづいてくれない。ようやく、今では露子自身が下手な看護婦以上に病人の面倒をみられるようになったので、舅の一切は露子まかせになってしまった。今となつては香苗は露子がいてくれたから助かつたと思つてゐる。あの氣難しい我がままな病人の機嫌をとるだけでも、自分ひとりにまかせられたのでは、並大抵ではなかつただろうと察してゐた。

嫁いで来た当座は、自分より二つも年下の露子が、舅の妾として一つ屋根の下にゐるというところに、香苗の潔べきは耐えられないような氣持ちを持つてゐた。葭町に出てゐた芸者をひかせたのだという露子は、無口でおとなしい女で、決して喜一郎の寵愛ちやうあいを笠に着るような振舞いはしなかつた。長男の嫁の香苗には勿論のこと、女中たちにまで目を伏せがちにおどおどとして暮らしてゐた。そういうのが喜一郎の好みなのか、年齢より地味な古風な着物を着て、髪だけは三日にあげず美容師にかかり、いつでもきちんと清楚な鬘シニヨンにしてまとめているのが、玄人らしいしなみといへばいいえた。

三男の紀彦が、喜一郎が倒れて半年ばかり後にコペンハーゲンへ行つてしまつてからは、離れは喜一郎と露子とだけの世界になつてゐる。儀礼的に、日に一度舅の病状を見舞うだけで、香苗はもう今では全く、舅を露子にまかせっぱなしといつてよかつた。

湯から上がると、外出の支度をして香苗は離れを見舞つた。

裏庭の奥に建つてゐる別棟の離れは、茶道に凝つてゐた姑の趣味で建てたもので、二階が来客

用の寢室づくりになっていて、階下に茶室がつくられていた。

喜一郎の病室は茶会によく使った十畳の広間の方の茶室を使っている。

玄関に入ると、雅趣のある数寄屋造りに似合わない甘いフランスもののオーデコロンの匂いが流れてくる。病臭や薬臭を嫌う、喜一郎の好みだということだが、病人も露子も、もう匂いにひたりすぎ、感覚が麻痺^{まひ}しているのか、ずいぶんこつてりと匂わさないでは感じなくなっているらしい。

香苗はここに入る度、思わず、眉をひそめ、反射的に軽く鼻をおおってしまう。

気配を聞きつけてすぐ、露子があらわれた。細面の白い顔に白粉気もなく、薄い太い眉をぼうつと煙らせて一重瞼のぬれぬれした目を、癖ですぐ伏せた。

「お早うございます。さあどうぞ」

いつものきまりきった挨拶だった。

「いかが、おじいちゃまは」

「はい、今朝は御機嫌よくて……」

これもまるでテープレコーダーに吹きこんであるようなお定まりの会話なのだ。露子は決して自分の方からはよいな口を利かない。二、三步下がって、足音のない猫のような静かさで、香苗の後に従ってくる。

喜一郎は庭の方に軀をむけ、寝かされていた。

いつものように敷居ぎわに坐った香苗を目でなめるような見方をして、うなずいた。発病以来、ことばが不自由になっているので、それも露子がほとんど通訳のような役目をする。

「今日はとてもお顔色がおよろしいわ。あ、散髪なさいましたのね」

喜一郎は首だけでうなずいた。

「つうが……」

というように聞こえるのは、露子にやらせたといっているのだぐらひは香苗も聞きわけられるようになってゐる。

「午後から、天沼へいってまいります。紀彦さんと菖子さんのことで、お話があるんだそうです」

喜一郎が何かいいながらもどかしそうに露子を目でまねいた。露子が喜一郎の枕元にまわつて、耳を喜一郎の口におしつけるようにした。

「紀彦さまはいつまでいるつもりかと……聞いていらつしやいます」

露子が目を伏せたままいつて、いい終わると白い露子の耳から首筋に、ほうつと酔いを発したような血が上った。香苗はそれに気がつかず、

「それがねえおじいちゃま、また、滞在をのばす手続きをしてみましたのよ。ちつともあたしたち知らないうちに……菖子さんの方じゃ、大分やきもきしてきて、何だか誠意がどうのこうのつていいだし、順子さんが板ばさみで、困つていらつしやるようです」

出がけに花茂^{はなも}で買ってきた黄薔薇^{きばら}と、紀伊国屋のグレープフルーツの箱を土産に、香苗は天沼三丁目の須永家を訪れた。

「まあ、いいスーツ、紬のスーツもなかなか粋なものね」

いつもの例で、顔を合わせるなり順子は香苗の着ているものの批評をする。我がまま育ちの誰に遠慮もない順子の性質の率直さは、お世辞というものがなく、いい時はいい、悪い時は悪いで、はつきりしていた。何かに対しての好悪の感情や、批判の物指しの尺度が、その日の順子の気分为天候によって、かなり、揺れ動くくらいはあるが、香苗は順子のざつくばらんなさっぱりした気性は好きだった。良介より二つ年上のこの小姑は、娘時代から同窓だったしお茶の同門の姉弟子でもあった。

去年改築したリヴィングルームには、観葉樹がまるでちよつとした温室のようにどっさり飾られている。

「まるで植物園でしょ。面倒くさいってないのよ。でも、これに文句いったら、あたしの方も遠慮しなきゃならないから」

順子は首をすくめてみせる。観葉樹はこの家の主人敬吉の趣味だった。順子は女のくせに車マニアで、もう五台も買い替えている。

「今ね、またとてもほしい車みつけちゃったの、毎晩その車のこと夢にみて眠れないのよ」

順子はソファに落ちつきなり、きりだした。

「あたしのお友だちの旦那さんの持つてるものだけどコルチネGなの、すばらしい車よ。九十万なのよ。そんな只みたいないな値なんですもの」

「九十万が？」

「だってコルチネよ、あなた、百五十万でその人は買ったのよ。ただし、ちょっと、お仕事の手ちがい、急にお金が必要になったので売りたいっていうの」

「百五十万のものが九十万？　どっかこわれてるんじゃないかって？」

「ああ、ああ、話になんないなあ、こわれてなんかいませんよ。三千キロ走ったばかりなのよ。車で三千キロ走ったっていうのは、丁度一番使いこなした最高なの、全く理想的だわ。絶対出ものなのよ。それを敬吉は買い替えさせないっていうのよ」

「だって、そんな出物なら、すぐ買い手がつくでしょう」

「それがやっぱりこの不景気でしょ。何しろ百万という現金はね。それに、ツードアだし外車は売り難いのよ。だから、九十万でも離そうところだし、あたしは買いものだと思うのに、あら、何がおかしいの」

「だって……いつでも買い替える時は、同じようなことやってらっしゃるわ」

「おお、ブルータスよ、爾なごもか！　敬吉も、あなたそっくりのことをいうわよ」

それが景山家の人間共通の人一倍大きな涼しい目もとに、艶つやっぽい色をこめて大げさに怒じて